

旧南洋群島における 戦前の教育関係資料について（その2）

——主に「学校要覧」類を中心に——

小 林 茂 子

はじめに

『教育学論集』第61集（2019年）では、旧南洋群島の教育関係資料について、すでに復刻されている『南洋群島教育史』（1982年復刻、青史社）、現地児童用教科書『南洋群島国語読本』（全8巻、2006年復刻、大空社）、『南洋群島国語読本補遺』（全1巻、2012年復刻、大空社）をふまえ、現在確認できている教育雑誌『群島教育研究』『南洋教育』を取り上げ、その内容、所在、残存状況等を論じた。南洋群島の教育関係資料は、他の植民地教育の資料に比して残存しているものが極端に僅少であり、上記の教育雑誌も欠号が多く、全体的な内容を把握するにはまだまだ不十分である。今後関連資料の発掘は重要な取り組みとなる。そのため現在確認できる資料を整理し、欠損部分を明らかにしておくことは、必要な準備作業ではないだろうか。そこで今号では、いくつか散見している「学校要覧」類を整理し、残存状況を確認するとともに、残された資料のなかから各学校の教育活動の具体像を追い、そこからどのようなことを読み取ることができるのかをみていきたいと思う。

確認できた南洋群島における「学校要覧」は、現地児童が通う公学校のもの（6校8種類）と、日本人児童が通う小学校のもの（2校3種類）があ

る¹⁾。これらの発行された時期は、前者公学校のものが1930年代前半（ただしサイパン公学校は1940年発行のものも含まれる）、後者小学校のものが1930年代後半と1940年となっている。さらにこうした公学校、小学校の「学校要覧」のほかにも、南洋群島の教育活動の一端がわかる資料として、現在確認できている保護者会誌、補充教科書、木工徒弟養成所の「学校要覧」を取り上げる。いずれもまとまったものではないが、どのような資料なのかその概要を紹介する。

ところで、「日本の学校」が形づくられていく過程について、木村元は「教授」「訓練」「養護」が不可分のものとされ、身体管理から儀式や行事も教科と一体となって運営されることが求められるようになる、と説明する²⁾。また、小学校教育の定着を考える際に、行政の動向だけでなく、家族の意向を検討する視点の大切さを大門正克は述べている。つまり、学校は家庭と連絡を結び、学校の望む子ども像を伝えつつ、学校教育を定着させようとしているのだという³⁾。このような日本での学校教育の形成過程からみて、南洋群島の公学校、小学校の教育は、どのように考えられるだろうか。木村や大門の指摘をもとに、「教授、訓練、養護の一体化」「学校と家庭の連絡」「学校と地域のつながり」の観点を参照しつつ、限定的ではあるが残された「学校要覧」にみられる南洋群島での教育内容を検討することにした。

1. 「学校要覧」類の残存状況

1-1 公学校、小学校の「学校要覧」

南洋群島には、1939年の時点で公学校が26校、小学校が25校あった（表1・表2を参照）。

しかし、現在確認できている「学校要覧」は非常に少ない。確認できている南洋庁立の公学校と小学校の「学校要覧」は表3のとおりである。公

表1 公学校 教員数・学級数・児童数 (1939年4月末現在)

	支庁名	学校名	教員数				学級数				児童数						
			日本人		現地人		計	本科	補習科	計	本科		補習科		総数		
			男子	女子	計	男子					女子	計	男子	女子	計		
1	サイパン	サイパン *	7	2	9	5	2	7	115	110	225	72	47	119	187	157	344
2		ロタ	1	1	2	1	—	1	35	31	66	—	—	—	35	31	66
3	ヤップ	ヤップ *	5	1	6	2	2	4	37	28	65	64	40	104	101	68	169
4		ニフ	1	1	2	1	—	1	26	19	45	—	—	—	26	19	45
5		マキ	3	1	4	3	—	3	74	27	101	—	—	—	74	27	101
6	バラオ	コロール *	7	1	8	3	2	5	52	67	119	104	42	166	156	129	285
7		マルキヨク	2	1	3	2	—	2	37	43	80	—	—	—	37	43	80
8		ガラルド	2	1	3	2	—	2	56	54	110	—	—	—	56	54	110
9		ベリリュウ	2	1	3	2	—	2	36	24	60	—	—	—	36	24	60
10		アンガウル	2	1	3	1	—	1	22	18	40	—	—	—	22	18	40
11	トラック	夏島 *	4	1	5	2	2	4	86	34	120	85	35	120	171	69	240
12		春島	2	1	3	2	—	2	91	45	136	—	—	—	91	45	136
13		冬島	1	1	2	1	—	1	37	30	67	—	—	—	37	30	67
14		水曜島	2	1	3	2	—	2	85	76	161	—	—	—	85	76	161
15		月曜島	1	1	2	1	—	1	29	28	57	—	—	—	29	28	57
16		モートロック	1	1	2	1	—	1	60	30	90	—	—	—	60	30	90
17		秋島	1	1	2	1	—	1	61	28	89	—	—	—	61	28	89
18	ボナベ	コロニー *	5	1	6	3	2	5	110	67	177	86	27	113	196	94	290
19		ウー	2	—	2	2	—	2	42	44	86	—	—	—	42	44	86
20		マタラニーム	2	1	3	2	—	2	42	32	74	—	—	—	42	32	74
21		キチー	2	1	3	2	—	2	52	38	90	—	—	—	52	38	90
22		クサイ	2	1	3	2	—	2	45	51	96	—	—	—	45	51	96
23	ヤルート	ジャポール *	5	1	6	3	2	3	141	107	248	89	55	144	230	162	392
24		ウオツヂェ	2	1	3	2	—	2	82	64	146	—	—	—	82	64	146
25		クワゼリン	1	1	2	1	—	1	35	38	73	—	—	—	35	38	73
26		エボン	1	1	2	1	—	1	36	24	60	—	—	—	36	24	60
合計			66	26	92	50	12	62	1,524	1,157	2,681	500	266	766	2,024	1,423	3,447

注 1：補習科の併設校には＊を付した。

2：1943年の「南洋庁職員録」には、ガラスマオ公学校（バラオ）、ナモ公学校（ヤルート）が追加されている。

出典：南洋庁内部務企画課「南洋庁統計年鑑 昭和十四年」昭和十六年

表2 日本人小学校 教員数・学級数・児童数 (1939年4月末現在)

支庁名	学校名	教員数		学級数		児童数											
						尋常科						高等科			総数		
						訓導	嘱託	計	尋常科	高等科	計	男子	女子	計	男子	女子	計
1	サイバン	サイバン	20	3	23	22	4	26	650	683	1,333	107	56	163	757	739	1,496
2		マタンシヤ	13	1	14	6	1	7	174	173	347	24	25	49	198	198	396
3		チャツチャ	8	2	10	8	1	9	220	204	424	33	16	49	253	220	473
4		アスリート	11	3	14	8	1	9	241	196	437	42	24	66	283	220	503
5		チャランカ	13	3	16	8	1	9	241	228	469	35	30	65	276	258	534
6		テニアン	23	4	27	12	4	16	377	387	764	60	49	109	437	436	873
7		カーヒー	12	2	14	9	1	10	227	223	450	38	22	60	265	245	510
8		マルボ	12	2	14	6	1	7	187	182	369	34	18	52	221	200	421
9		ハゴイ(チューロ)	11	2	13	6	1	7	177	144	321	33	18	51	210	162	372
10		ロタ	10	1	11	7	1	8	177	209	386	13	2	15	190	211	401
11		タルガ	4	1	5	4	1	5	91	107	198	19	11	30	110	118	228
12		シルバール	1	1	2	4	—	4	80	81	161	—	—	—	80	81	161
13	ヤップ	ヤップ	5	3	8	1	—	1	33	35	68	—	—	—	33	35	68
14	バラオ	バラオ	14	2	16	13	2	15	442	420	862	68	50	118	510	470	980
15		清水	5	2	7	2	—	2	65	55	120	—	—	—	65	55	120
16		瑞穂	4	1	5	2	—	2	41	36	77	—	—	—	41	36	77
17		朝日	3	1	4	2	—	2	60	62	122	—	—	—	60	62	122
18		アンガウル	2	2	4	1	—	1	31	34	65	—	—	—	31	34	65
19		ベリリュウ	1	1	2	1	—	1	22	26	48	—	—	—	22	26	48
20	トラック	トラック	6	0	6	3	—	3	73	100	173	—	—	—	73	100	173
21		水曜島	2	0	2	1	—	1	25	13	38	—	—	—	25	13	38
22	ボナベ	ボナベ	12	1	13	5	—	5	116	153	269	26	11	37	142	164	306
23		マタラニーム	2	2	4	2	—	2	57	47	104	—	—	—	57	47	104
24		春來	4	0	4	1	—	1	40	31	71	—	—	—	40	31	71
25	ヤルート	ヤルート	1	1	2	1	—	1	18	24	42	—	—	—	18	24	42
合計			199	41	240	135	19	154	3,865	3,853	7,718	532	332	864	4,397	4,185	8,582

注：1943年の「南洋庁職員録」には、サイバン第二、タロホホ、バガン（サイバン）、大和、ガスバン、マルキヨク（バラオ）、

秋島（トラック）、クサイ（ボナベ）の各小学校が追加されている。

出典：南洋庁内部務企画課「南洋庁統計年鑑 昭和十四年」昭和十六年

表3 確認できている公学校、小学校の「学校要覧」

	学校要覧名	所在支庁	発行年
公学校	南洋庁コロール公学校本校概況書	パラオ支庁	推定 1932 年か 33 年
	南洋庁ヤップ公学校学校要覧	ヤップ支庁	1933 年
	南洋庁サイパン公学校学校経営便覧	サイパン支庁	1933 年
	南洋庁サイパン公学校学校要覧	サイパン支庁	1940 年
	南洋庁メタラニウム公学校一覧表	ボナベ支庁	1932 年
	南洋庁メタラニウム公学校一覧表	ボナベ支庁	1933 年
	南洋庁ガラルド公学校一覧	パラオ支庁	推定 1932 年か 33 年
	南洋庁マルキョク公学校一覧	パラオ支庁	1932 年
(その他)	南洋庁木工徒弟養成所概況	パラオ支庁	1933 年
小学校	南洋庁パラオ尋常高等小学校学校要覧	パラオ支庁	1939 年
	南洋庁パラオ第一第二尋常高等小学校学校要覧	パラオ支庁	1940 年
	南洋庁サイパン尋常高等小学校学校要覧	サイパン支庁	1938 年

出典：章末の付表1・2・3より作成（発行欄は発行年のみ記入）

学校の「学校要覧」は、コロール公学校（パラオ支庁：推定 1932 年か 33 年）、ヤップ公学校（ヤップ支庁：1933 年）、サイパン公学校（サイパン支庁：1933 年と 1940 年）、メタラニウム公学校（ボナベ支庁：1932 年と 1933 年）、ガラルド公学校（パラオ支庁：推定 1932 年か 33 年）、マルキョク公学校（パラオ支庁：1932 年）の 6 校 8 種類である⁴⁾。小学校は、すべて高等小学校のもので、パラオ尋常高等小学校（パラオ支庁：1939 年と 1940 年）、サイパン尋常高等小学校（サイパン支庁：1938 年）の 2 校 3 種類である（それぞれの目次については章末の付表1・2・3を参照）。全体の学校数からみて公学校、小学校ともに残存状況は僅少であるが、小学校についてのものは、とくに 25 校中わずか 2 校しか残されておらず、きわめて少ない。

また、残存している発行時期についても公学校と小学校とは異なる。大半の公学校のものは、1930 年代前半の発行である。これらは琉球大学附

属図書館矢内原忠雄文庫に所蔵されている。ただし、1940年発行のサイパン公学校の「学校要覧」は、アジア太平洋資料室⁵⁾の所蔵である。矢内原は、南洋群島統治研究を1932年5月に太平洋問題調査会からの依頼により始めており、その際行なわれた文献調査、質問紙調査、現地調査など各種の諸資料が、その他の植民地関係の資料とともに、矢内原忠雄文庫に収められている⁶⁾。そのため1930年代前半のものが集まっている。諸資料のなかにある公学校の「学校要覧」類をみるとすべてが手書きで書かれている。体裁は冊子のものと一覧表のものがあり、なかには劣化により判読がかなり難しいものもある。付表1・2をみてもわかるように、記述内容は各学校により差がみられる。また、支庁別の残存状況については、6つの支庁のうちヤルート支庁とトラック支庁のものは残されていない。

一方、高等小学校の「学校要覧」は、発行年が1930年代後半と1940年のものであり、すべてアジア太平洋資料室所蔵である。残されている2校3種類のは、両校とも活字で印刷されており読みやすい。この限られたパラオ、サイパン両高等小学校のものをみる限りだが、記述的な内容にそれほど大きな違いはみられない。1938年発行のサイパン高等小学校の「学校要覧」は、『沖縄県史 資料編17 旧南洋群島関係資料 近代5』（2003年）⁷⁾にも掲載されている。そこには沖縄県の編集室により発掘された、同校の元児童が保持していた通信（知）表、表彰状、修了証書、昭和18年度テニアン国民学校行事予定表なども関連資料として一緒に収められている。ここからも南洋群島の小学校における教育活動の一端を垣間見ることができる。

1-2 その他の残存する教育関係資料

前節で述べた琉球大学附属図書館矢内原忠雄文庫には、公学校の「学校要覧」類のほかにもいくつかの教育関係資料が収められている。第61集で

も触れた公学校児童による作文集『日の光』⁸⁾や公学校の「学校児童年齢調」「児童就学歩合調」などがあげられる。また、そのほかの教育関係資料として第61集で取り上げた日本人教員・田中準一の『風来坊先生滞南記—或る教師の南洋群島生活記録』『カナカの子らと共に—続風来坊先生滞南記—』⁹⁾なども現地の教育を知るうえで貴重な資料である。

ここではさらに、確認できた次の3点の資料を取り上げる。1点めは、サイパン尋常小学校の保護者が作成した保護者会誌『さいぱん』(1935年)である(図1・表4)。これは同誌によると保護者会が単独で発刊した南洋群島での初めての会誌ということであり、この号が創刊号にあたる(その後、何号まで続刊されたかは不明である)。ここからは、小学校の親たちが教育に対してどのような思いや願いを持っていたのか、あるいは保護者会としてどのような活動に取り組んでいたのかなど、子どもたちの学校生活の様子を通して知ることができる。例えば、子どもたちの衛生対策として、飲料水を確保するために保護者会としてどんな濾過器を購入し、どのような常備薬品を置き、洗面所や便所、足洗い場などの清潔をいかに保つかなどが記されている。また親の関心の高い進路先についても、内地の中等学校に進学した者はどこの学校に入学したかなど、より詳細で具体的なことがらが書かれている¹⁰⁾。こうした日常の細かな教育事情は、教育政策だけでは見えない貴重な情報であり、資料が乏しい南洋群島においては検討すべき興味深い事項がいくつも含まれている。このような保護者会活動は、1938年の「サイパン尋常高等小学校学校要覧」にも記されており、そのなかにある「保護者会(学校教育援助 家庭教育ノ進歩ヲ目的トシ保護者全部ニテ組織ス)」¹¹⁾の部分を実現化した活動であるといえる。

2点めは、パラオ尋常高等小学校から発刊された『南洋群島補充理科書上巻』(1940年5月5日納本)¹²⁾である(図2)。日本人児童に対しては内地と同じ教科書が使われていたが、教材として現地の自然環境にそぐわな

図 1 保護者会誌『さいばん』
表紙

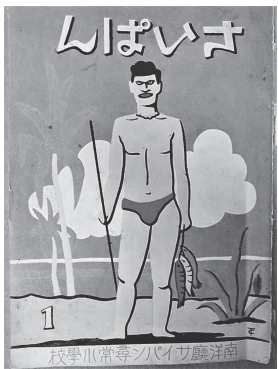


図 2 『南洋群島補充理科書
上巻』表紙

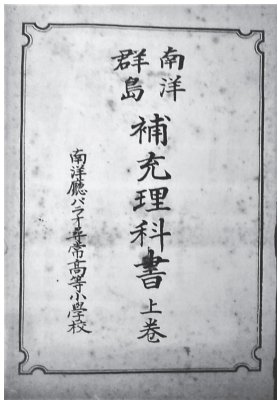


表 4 サイバン尋常小學校保護者会誌・目次

さいばん・創刊号（第一巻第一号）		
サイバン尋常小學校 編集兼発行人 谷川儀六		
発行所 サイバン尋常小學校内 サイバン尋常小學校保護者会		
昭和十（1935）年七月三十一日印刷 昭和十年八月一日発行		
・表紙		
・口絵		
発刊の辞	学校長	谷川儀六
発刊を祝す	サイバン支庁長	田中茂
偶感	ガラバン町総代	田辺金太郎
■保護者欄		
教育上に対する所感を述て 創刊の辞とす	彩小保護者会幹事	木下新蔵
十年前を憶ふ	同 幹事	土井十太郎
南洋在住者の望む中等学校 に就いて	同 幹事	山村清次
過去現在及希望に就いて	同 幹事	小林藤太郎
■学校欄 其の一		
我が校の沿革		
校内生活の一日		
卒業生の内地中等学校入学状況を主題として		
耳と目と口	学校医	岡谷 昇
■教職員欄		
一年生の担任より	一ノ一組担任	垂永文彦
	一ノ二組担任	迎 柳子
教職員の一人として父兄の 参観を希望す	二ノ一組担任	大平 巧
私の教育信念	二ノ二組担任	井上宗敏
二年生の担任より	二ノ三組担任	羽生サワ
偶感	三ノ一組担任	吉野義水
図画と手工に就いて	三ノ二組担任	松尾隆成
算術科に於ける応用問題学 習に就いて	四ノ一組担任	田中秀信
児童図画作品の視方	五ノ一組担任	錦織俊吉
内地だより	五ノ二組担任	長田武雄
教育無上道	六ノ一組担任	増澤重之
六女を対象として	六ノ二組担任	指村寅治
裁縫科の指導予定		
■児童欄		
児童文苑（尋ニノ一～尋六ノ二）		
■学校欄 其の二		
昭和十年年度学校主要行事予定表		
昭和九年度衛生施設の概要		
昭和九年度遠足会		
音楽会		
昭和九年度ラジオ新聞社主催軟式少年野球大会所感		
昭和九年度運動会記事		
保護者会記事会務		
保護者会記事会計		
編集後記		

い点もみられた。この補充理科書を編さんした事情について、担当したパラオ高等小学校教員の証言によると、「当時教科書は、内地と同じ国定教科書を使用していたが、何かと不便があり特に理科は指導に困るし、又、南洋という生活環境を教えることも出来なかったので、副読本として理科教科書を作ることになった」¹³⁾という。また、編さんの経緯については、「第二小学校が独立し野元辰美校長が赴任し、私たち数人（パラオ高等小学校の教員のこと―引用者注）は南洋群島理科書の編纂を委嘱され委員会で何度となく練りなおし群島中の小学校で使うようになりました」¹⁴⁾との証言もあり、複数のパラオ小学校の教員が作成に携わったことがわかる。本書冒頭の「南洋群島補充理科書取扱方針」にあるように、「本書は本群島に於ける理科教材中適当なるものを挙げ」¹⁵⁾て、南洋独自の項目を小学理科書に追加する形で作られた。残念ながら上巻しか残っていないが、追加項目は次のようなものであった。

「第四学年 1 ぶっそうげ, 2 こか, 3 いんどそけい, 4 かぼつくの木, 5 いかだかづら 6 くだものとけいそう 7 たろいも・きやさば, 8 おきなはみちしば 9 かぼつくの葉のおちることとみ, 10 ばば (い) や, 11 なんやううつぼかづら, 12 さぼてん

第五学年 1 ほうわうぼく, 2 たいへいやうてつぼく, 3 ばんのき, 4 もくまわう, 5 ばなな, 6 はひがしらこぼばと, 7 くらだみつすひ, 8 さわさつぷ 9 しまほう, 10 かつを, 11 れもんぐらす, 12 さたうきび, 13 おほたにわたり, 14 まんごう, 15 こうひいのき・かかをのき, 16 ここやし

第六学年 1 ぱいんあつぶる, 2 たこのき, 3 やしがに, 4 ばらごむのき」¹⁶⁾

身近にある熱帯の動植物などを使って南洋群島の環境的特徴を教えるとともに、一方で「本群島児童中種々の事情により、内地の小学校へ転ずる者ある等のこと」¹⁷⁾についても配慮が必要で、内地の教科書も併用した。

3 点めとして、矢内原忠雄文庫に収められている『南洋庁木工徒弟養成所概況』（1933 年）をあげる（付表 2 を参照）。木工徒弟養成所は、建築と木工に従事する者を養成する二年制の学校として 1926 年に設立された。南洋群島では公学校の初等教育後、現地児童が進学できる中等普通教育機関はなく、同校が公学校卒業後進学できる唯一の中等教育的な機関であった。しかも進学が許されるのは選抜された少数の者だけであった¹⁸⁾。

『南洋庁木工徒弟養成所概況』の中で、貴重な情報として生徒の実態がわかるものに、「卒業後ノ状況」がある。それによると、第 6 回まで（1932 年 3 月まで）の卒業生徒数は 59 名。その内訳は、第 1 回 9 名、第 2 回 10 名、第 3 回 9 名、第 4、5 回各 10 名、第 6 回 11 名、となっている。59 名の生徒たちの卒業後の状況は以下のとおりである。

「官庁ノ大工ニ雇レラル者 15（名）、アンガウル採鉱所ニ大工トシテ雇レラル者 4（名）、邦人大工ニ雇レラル者 13（名）、公学校助教員トシテ奉職ノ者 5（名）、研究生トシテ在学中ノ者 1（名）、自営ノ者 17（名）、郵便局及医院ニ雇レラル者 3（名）、死亡 1（名）、計 59（名）」¹⁹⁾

同校を 1940 年から 2 年間に在籍したホセイ・トデラさんは、当時の授業について「最初、一年の生徒の時は、木を切る切り方だけ。それから道具の研ぎ方。カンナとか、ノコとか、ノミの研ぎ方。みんなそれができるようになってから、それから実地に先生からすべての木の組み方を習った。また、模型もつくっておった。模型を設計してね。一寸角の木でそれを造る」²⁰⁾と証言している。実地と学科をみっちり教えられたようである。し

かし、卒業後の状況をみると、建築技術と日本語能力をもったこのような優秀な人材を十分に活かせる労働環境は少なく、日本人の下で補助的な仕事に就いたものが多かったと思われる。

2. 「学校要覧」からみた南洋群島での教育活動内容

2-1 公学校の教育活動——1930年代前半

付表1・2をみてもわかるように、公学校の「学校要覧」は非常に詳細なものと簡略に書かれたものがあり、記載内容は様々である。概ね共通している項目は、校地、校舎の配置図、学区の範囲、在籍児童の就学状況などである。

では、「日本の学校」にみられる「教授、訓練、養護の一体化」についてはどう書かれているか。記載がみられるメトラニウム公学校（1933年）、サイパン公学校、コロール公学校の例を取り上げてみていこう。

まず、メトラニウム公学校（1933年）は、「教授方面 1 出来ルダケ平易ニ、2 直截物・動作ニヨリテ会得セシメ、3 反復練習ニヨツテ理解ヲ図リ、……（中略）教授ハ出来ル丈児童ノ実生活トシ（以下略）」

訓練方面 一 キマリヨク、ゲンキデ、ヨクハタラク、スナオデアルヤウニ平素特ニ意ヲ注グ 二 毎日ノ心得 1……2 御挨拶ヲ忘レナイコト、3 日本ノ言葉ヲ使ウコト（以下略）

養護方面 1 毎朝々会ノ際二分間体操ヲ行ナウ 2 年ニ一回身体検査施行（以下略）」²¹⁾となっている。また、サイパン公学校は「施設ノ大要」のなかで、「a 徳育的方面 児童ノ徳性ヲ涵養シ彼等道德ノ実践ヲ指導スルタメ全力ヲ傾注シテイルガ其ノ中心事項ヲ揚ゲルト。社会奉仕事業（略）。勤労週間。生物愛護（以下略）」

b 知識技能的方面 画一ナ教授ハ児童ヲ毒スルモノアル故ニ郷土ノ情况ヲ考慮シテ彼等ノ生活ニ必須ナ事項ヲ授ケ（中略）。談話会。学芸会

(略)。理科園ノ経営 (以下略)

c 養護方面 …健康ヲ保護増進シ…進ンデ規律ヲ守リ協同シ尚ブ習慣ヲ身ニ付ケナレバナラナイ (中略)。運動会。遠足。朝礼体操。衛生講話。身体検査。清潔日 (以下略)」²²⁾と記されている。そして、コロール公学校については、「教授ノ努力」では、「…国語力、推理力 (特に応用力) ニ於テ邦人児童ニ比シ遙カニ劣ルヲ以テ之ニ重点ヲ置キ」とし、「訓練ノ方法」として、「1 修身科徳目ノ実践 2 児童心得ノ徹底 3 児童性行ノ善導」をあげている。とくにその中で、「本校児童ノ性行ノ欠点 イ責任觀念薄シ ロ勤勞精神乏シ ハ清潔整頓念極メテ乏シ (以下略)」など 10 項目をあげ、さらにそれらに対応する 10 項目の「善導方法」が書かれている。「児童ノ養護」では、「生理的知識衛生思想ノ普及 修身理科家事ノ教授ニ於テ之ガ指導ヲナス」、「病氣ノ手当 応急薬及応急処置用品ヲ設備ス。(中略) 毎年数回糞便検査ヲ行ヒ」などとし、加えて通院治療費の無料又は低額についても述べられている²³⁾。

このような記述をみると、南洋群島の公学校では「教授、訓練、養護の一体化」をめざす方向性は、現地児童の行動・思考の「劣等性」、生活文化の「低位性」を日本の教育によって「善導」することにあつたといえるのではないか。例えば、サイパン公学校の教育方針は、南洋群島では島語 (現地語) で教えることは無意味であり、文化の程度が低いので、「日本語ノ普及」と「迷信打破」に力を入れ、「心眼ヲ啓イテヤナケレバナラナイ」と書かれている²⁴⁾。また、コロール公学校は、前述のように 10 項目もの指導の児童の「性行ノ欠点」をあげ、それらを「善導」することを訓練の方法としている。つまり、教科のなかで、日本語をしっかりと教えつつ、修身や理科、体操などを通して「日本の学校」の規範や内容を学び、訓練によって繰り返し、養護では遠足や運動会の行事や身体検査を通して、体を鍛え同時に衛生觀念や規律などを学ばす、ということが実践されたのである。

こうした点からわかるように、この時期はとくに「皇民化」をめざす教育活動にそれほど積極的ではなかったことに気がつく。

では、「学校と地域のつながり」はどうだろうか。

これについてはマルキョク公学校以外のどの「学校要覧」にも掲載がみられる。そこでは、卒業生や村の若者に対して同窓会や青年団が組織されていた。公学校で培った教えをさらに継続させるねらいがあったといえよう。その中から地域のリーダー（ヤップ公学校では「一般島民ノ中堅」、コロロール公学校では「島民各方面ノ幹部」と表現されている）の養成をもめざしていることが窺われる。ところが「学校と家庭の連絡」の観点をみると、サイパン公学校で若干触れられているが、ほとんどの「学校要覧」には記述がみられない。これはなぜだろうか。留意すべきは1930年代前半の公学校の教育活動であるという点にあるのではないか。後述するが、1940年発行のサイパン公学校の「学校要覧」には、詳細な保護者会活動の記述とともに、「皇民化」の内容が色濃く表れてくる。この1930年代前半と1940年の間に公学校教育は大きく変化したものと考えられる。発行時期が異なる、同一公学校の「学校要覧」が残存していることにより、一つの学校を通して時代による教育活動の変化を捉えることができたといえよう。

2-2 高等小学校の教育活動——1930年代後半と1940年

さて、日本人児童に対する高等小学校の教育内容はどうかであろうか。

パラオ、サイパン両高等小学校の教育方針をみると、「教育勅語ノ御主旨ヲ奉体シ」、「熱帯地南洋ノ開明ニ奉仕スル」国民を養成することを謳っている。これに基づき両校とも「教授、訓練、養護の一体化」について詳細な記述がみられる。

パラオ高等小学校「学校要覧」（1940年）の例でみていく。「教授概況」の方針では、「自発的学習態度」の養成や「郷土資材ノ活用」など7項目を

掲げ、具体的に課外教授、校外教授、遠足、展覧会、学芸会、祝祭日の儀式などが計画化されている。前章でみた「南洋群島補充理科書」の活用についても触れられている。「訓練ノ概況」では、「朝会」の記述が中心である。「皇室、国家、祖先、父母等ニ対スル感謝ノ念ヲ喚起シ、一日ノ努力ヲ誓ハシムル」とし、月曜日の朝会はとくに「イ敬礼、ロ国旗掲揚、ハ奉安所奉拝、ニ神宮遙拝、ホ校歌合唱、ヘ校長訓話（以下略）」など一連の取り組みが列記されている。そのほか祝祭日、団体訓練、労作訓練などの取り組みもみられる。「体育養護概況」では、毎朝会のラジオ体操、国民体操、遠足、行軍などの「体力ノ錬磨」と、児童の身体状況から教室の採光など環境衛生に関する「養護衛生」が14項目にわたって書かれている²⁵⁾。サイパン高等小学校の「学校要覧」にも似たような記載内容がある。これ以前の小学校あるいは高等小学校の「学校要覧」が現存していないため、明確なことはわからないが、少なくとも1930年代後半には内地と同様に、「皇民化」による「教授、訓練、養護の一体化」の教育活動は整備され取り組まれていたといえるだろう。

また、「学校と地域との連絡」では、1939年に出された「南洋群島青年学校規則」の影響が読み取れる。1939年と1940年のパラオ高等小学校の「学校要覧」をみると、コロール青年学校の修業年限が「当分ノ間二カ年」から「四カ年制」へと改正され、生徒数も57名から75名へと増加している。さらに「学校と家庭とのつながり」については、前章でもみたようにサイパン尋常小学校では、保護者が独自で会誌を発行しており、『沖縄県史』に掲載のある実際の児童の「通信表」をみると、学校から成績表や出席表、身体検査結果が伝えられるとともに、その中に「本校教育施設（教授、訓練、養護）」や「毎日ノ行事」「毎週ノ行事」などが刷り込まれて各家庭に配布している²⁶⁾。学校と家庭との連絡を密にし、相互の協力関係を築こうとしているのがわかる。パラオ高等小学校の「学校要覧」でも「校

報「学校通信」ノ発行」との記述があり、実物は現存していないが、家庭との連絡が図られていたことが窺われる。

このように現存している1930年代後半のパラオ、サイパン両高等小学校の「学校要覧」からは、内地の教育に則りつつ「皇民化」による教育活動がはっきりと打ち出され、また南洋群島という熱帯での教育を勘案して、教育活動が計画、実践されていたことが具体的な内容として把握できる。

おわりに

以上みてきたように、現存している南洋群島での公学校、小学校の「学校要覧」類は、学校別にみても発行時期をみても、残されたものは非常に少なくごく限られている。しかし、それらを整理、検討することで、少しずつだが南洋群島の教育活動の具体的な様相をつかむことが可能となる。例えば、サイパン公学校の「学校要覧」は1933年と1940年のものが残されており、同じ学校での教育活動が時期によりどのように変化しているのかを比較することができる。こうした検討により、公学校の教育内容は1933年から1940年の8年間の間に大きく変わったことがはっきりと読み取れる²⁷⁾。すなわち1940年、公学校の教育は「皇民化」に大きく傾斜し、「朝会」などの教育活動は軍隊的な訓練の場へと変わっていたことを「学校要覧」は示している。また保護者との関わり方が、1933年では「社会的方面」の中に、保護者会の一語があるだけであったが、1940年には「父兄との連絡」が加えられ、「1 保護者会、2 学級単位ノ保護者会、3 保護者会幹事会、4 家庭訪問」²⁸⁾とあり、非常に綿密になっているのに気がつく。1940年つまり戦時体制に入り、公学校での家庭との連絡は、小学校の保護者会のように、保護者と学校との支援、協力を築くといったものではなく、親世代（一般の現地住民）にも日本語を浸透させ、公学校教育の理解者として組織化する必要があったのではないかと思われる。これらの親たちがそ

ののち、戦争への良き協力者となっていくであろうことは十分考えられ、現地住民を含んだ総動員体制へと進んでいったことを感じさせる。つまり公学校のもつ役割が時期により変化していったことが読み取れるのである。同じ公学校の、発行時期の異なる「学校要覧」が偶然にも残存していたために、公学校での教育活動の変化を確認することができた事例といえるであろう。

今後は、一層の資料発掘に努めることはもちろんのこと、こうした既存資料をさらに活用して、他の植民地の「学校要覧」との比較など研究の視野を広げて、南洋群島の教育実態を明らかにしていく必要があると考えている。

注

- 1) 南洋群島における教育政策については『教育学論集』第61集で全体の概要を説明している。簡単に述べると委任統治期においては、現地児童に対して1922年に「南洋庁公学校規則」が出され、本科3年、補習科2年の初等教育が行われた。日本人児童に対しては同年に「南洋庁小学校規則」を制定し、内地の小学校令及び文部省令に準じ、尋常小学校6年、尋常高等小学校2年を修業年限とした。
- 2) 木村元『学校の戦後史』岩波新書、2015年、33-41頁。
- 3) 大門正克『増補版 民衆の教育体験―戦前・戦中の子どもたち』岩波書店、2019年、66-69頁。
- 4) 公学校ほか木工徒弟養成所（1933年）の「学校要覧」が確認できる。これについては、「1-2 その他の残存する教育関係資料」の節を参照。
- 5) アジア会館のなかに併設された施設。ミクロネシア関係の資料が収集されている。山口洋児『日本統治下ミクロネシア文献目録』（風響社、2000年）により所蔵資料が確認できる。
- 6) 今泉裕美子「矢内原忠雄文庫南洋群島関係資料展展示資料解題」『矢内原忠雄文庫南洋群島関係資料展』琉球大学附属図書館、1995年、8-12頁。矢内原忠雄文庫はウェブ上で閲覧できる。
- 7) 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編纂室『沖縄県史 資料編 17 旧南洋群島関係資料 近代5』沖縄県教育委員会、2003年、276-283頁。
- 8) 雑誌『日の光』は公学校児童の作文集である。毎年2回刊行し、公学校卒業生に無償で配布していたという。昭和10年まで（第1号から第16号まで）の発行部数は48,000部とのことだが（『南洋群島教育史』427-429頁）、矢内原忠雄文庫

- に現存しているのは第1-10号のみ、そのうち第2号と第5号は欠号である。
- 9) 田中準一の実践について、拙稿「1930年代南洋群島における公学校教育の果たす役割―「体験記」からみた日本人教員の教育活動を手がかりに―」『移民研究年報』第23号、2017年を参照。
 - 10) 詳しくは、拙稿「南洋群島における日本人小学校教育活動―南洋庁サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』(1935年)をもとに―」『研究紀要』10、JICA横浜 海外移住資料館、2015年度を参照。『さいぱん』は国立歴史民俗博物館所蔵。
 - 11) 『南洋庁サイパン尋常高等小学校学校要覧』(昭和十三年七月一日)、頁数なし(折込み用紙3枚目)。
 - 12) 奥付には、「昭和十五年四月卅日印刷 昭和十五年五月五日納本／編集兼発行人パラオ尋常高等小学校 山本時治／印刷人パラオ島コロール町 古川清治／印刷所パラオ島コロール町 南洋新報社／発行所南洋群島パラオ島コロール町 パラオ尋常高等小学校(非売品)」と書かれている。
 - 13) パラオ第一尋常高等小学校『パラオの思い出』(私家版)、推定1977年、10頁。
 - 14) 同上、32頁。
 - 15) 南洋庁パラオ尋常高等小学校『南洋群島補充理科書 上巻』、1940年、折込み用紙1枚目(「南洋群島補充理科所取扱方針」)。
 - 16) 同上、折込み用紙2-3枚目(「南洋群島小学理科要目」)。
 - 17) 同上、折込み用紙1枚目(「小学理科書取扱方針」)。
 - 18) 全島から集まったとはいえ、1933年現在の生徒数は、一学年10名、二学年9名、研究生1名、計20名であった(『南洋庁木工徒弟養成所概況』昭和八年六月一九日、頁数なし(2頁目))。
 - 19) 同上、3-4頁目。
 - 20) ホセイ・トデラ「私は日本の技術で名工になった」『太平洋学会誌』第53号(第14巻第4号)、1992年、46頁。
 - 21) 『南洋庁メタラニウム公学校一覧表』昭和八年四月一日現在。
 - 22) 『南洋庁サイパン公学校学校経営便覧』昭和八年度、頁数なし(8頁目)。
 - 23) 『南洋庁コロール公学校本校概況書』昭和八年、頁数なし(7-10頁目)。
 - 24) 前掲、『南洋庁サイパン公学校学校経営便覧』、(7頁目)。
 - 25) 『南洋庁パラオ第一第二尋常高等小学校』昭和十五年度、7-18頁。
 - 26) 前掲、『沖縄県史 資料編17 旧南洋群島関係資料 近代5』、283頁「森真之氏関係通知表類」。
 - 27) 2つの「学校要覧」の違いについては、拙稿「南洋庁にみる現地児童の公学校教育―一時期の異なる「学校要覧」を手がかりに―」歴史科学協議会『歴史評論』No.857、2021年9月で論じた。
 - 28) 『南洋庁サイパン公学校学校要覧』昭和拾五年、5-6頁(頁の付けた方が2枚を1頁として打ってある)。

付表1 現地児童の公学校の「学校要覧」目次（琉球大学附属図書館欠内原忠雄文庫所蔵、但し1940年版サイパン公学校はアジア太平洋資料室所蔵）（確認できたもの）

南洋庁コロロ公学校本校概況書 1932年か1933年（推定）	一六、寄宿舎 ◇寄宿舎児童数 ◇寄宿舎ニ於ケル日課 一七、学用品及食料費給与 一八、児童文庫 一九、事務分掌 ■対外的施設 二〇、練習生ノ派遣 ◇目的 二一、社会教育 1. 青年指導 ◇青年団 一〇、卒業生 ◇卒業生ノ指導 1. 就職口ノ周旋 2. 木工徒弟養成所入學推薦 3. 小学校入學 4. 内地留學 5. 各種講習会開催 6. 青年団入団勧誘 一一、教科目及教授時数 一二、職員 一三、教授ノ努力 一四、訓育ノ努力 ◇訓育ノ目標 ◇訓育ノ方法 ◇本校児童ノ性行欠点 ◇右欠点ニ対スル善導方法 一五、児童ノ養護 ◇生理的知識衛生思想ノ普及 ◇病氣ノ手当
-----------------------------------	---

（◇は本文の項目を加筆）

南洋庁ヤップ公学校学校要覧 昭和八（1933）年五月	一、沿革大要 二、校地校舎 地図 三、経費 四、現在職員 五、学級編制 六、出身地別在学児童数 七、出席状況 八、卒業生状況 九、寄宿舎状況 ・在学児童数 ・訓練事項 ・日課 十、行事 十一、社会的教育施設 1. 同窓会 2. 青年団
-------------------------------	--

（●は本文の項目を加筆）

南洋庁サイパン公学校学校経営便覧 昭和八（1933）年	一、本校沿革大要 二、本校ノ位置及通学児童 三、本校教育ノ方針ト施設ノ大要 a 德育の方面 b 知識技能の方面 c 養護の方面 d 社会的の方面 四、本校児童ト入種別及本校就学状況
--------------------------------	---

南洋庁サイパン公学校学校要覧 昭和拾五（1940）年四月七日	一、本校沿革ノ大要 二、土地及校舎 1 土地 2 校舎 三、修業年限 四、各教科目及教授時数 五、本校入種別児童數ト学級編制 六、本校経費（昭和十四年度） 七、本校ノ教育方針ト施設経営ノ大要 (1)一般目的 (2)施設経営ノ大要 イ、訓練 ロ、教授 ハ、養護 (附) 父兄との連絡 本校ノ朝会ニツイテ △スタートガ計画デアル (附) 黙祷ノ言葉 △検閲 △参考資料 △終始一貫 1. 島民ノ人口 2. 島民児童ノ特質 イ、技能科ガ一般ニ優秀 ロ、道徳ノ実践ハ邦人児童ノ域 ハ、思考推理判斷等ハ一般ニ劣ル
-----------------------------------	---

付表 2 現地児童の公学校と木工徒培養成所の「学校要覧」目次（琉球大学附属図書館矢内原忠雄文庫所蔵）（確認できたもの）

<p>南洋庁メタラニウム公学校一覧表 昭和七（1932）年四月末日調整</p> <p>一、創立 二、名称ノ変更 三、校地 四、校舎 五、通学区域 六、職員（創立以来） 七、児童 八、授業時間 九、学校ノ鐘 一〇、ガツコウノキマリ 一一、マイニチノコロエ 一二、訓練ノ目標（ヨイヒトニナル） 一三、卒業児童 一四、青年団ノ指導 一五、気象観測 一六、教育方針 • 眼目 • 取扱 • 方法 一七、環境 ◎覚悟</p>	<p>南洋庁メタラニウム公学校一覧表 昭和八（1933）年四月一日現在</p> <p>○位置 ○創立 ○沿革概要 ○学級編制 ○学級児童出身島別 ○土地 ○校舎 ○教員宿舎 ○教育費予算 ○就学歩合 ○入学（昭和七年度） ○卒業 ○施設概要 • 教授方面 • 訓練方面 • 養護方面 • 卒業生指導</p>	<p>南洋庁ガラルド公学校一覧 昭和七（1932）年か昭和八（1933）年 （推定）</p> <p>一、沿革 二、学区及就学状況 三、校地 附学園及実習場 四、校舎 附教員宿舎 五、附属 1. ハラオ支庁管区全図 2. ガラルド公学校学区各村全図 3. 校地及附属地平面図 4. 青年団郷士林位置図</p>	<p>南洋庁マルキョク公学校一覧 昭和七（1932）年十月現在</p> <p>• 沿革 廣表 一、位置 二、校地坪数 三、附属地坪数 四、校舎坪数 五、附属地建物坪数 六、教員宿舎 • 職員、児童及学級編成</p>
<p>南洋庁木工徒培養成所概況 昭和八（1933）年六月十九日</p> <p>一、沿革ノ大要 二、校地総坪数 一、校舎総建物坪数 一、寄宿舎建坪数 一、附属建物坪数 一、学年 一、入学区域 一、学級 一、生徒数 一、生徒出身地別 一、卒業生徒数 一、卒業後ノ状況 一、生徒出席状況 一、職員数 一、教科目 一、給与 一、本年度経費 一、創立以来ノ主ナル生徒実習作業</p>			

付表 3 日本人児童の小学校の「学校要覧」目次〈アジア太平洋資料室所蔵〉（確認できたもの）

<p>南洋庁パライオ尋常高等小学校 学校要覧 昭和十四（1939）年度 校地校舍平面略図 敷地面積 一、学校概観 一、沿革大要 一、教育方針 一、施設方針 一、教授概況 一、訓練概況 一、体育養護概況 一、学級編制表 一、学校行事表 一、学校経費一覧表 一、児童身体状況 一、卒業及入学概況 一、中途入退学状況 一、児童出身県別表 一、保護者職業別表 一、保護者会概況 一、コロール青年学校概況</p>	<p>南洋庁パライオ第一第二尋常高等学校 学校要覧 昭和十五（1940）年度 校地校舍平面略図 敷地面積 一、学校概観 一、沿革大要 一、教育方針 一、施設方針 一、教授概況 一、各科教授方針 一、訓練概況 一、体育養護概況 一、学級編制表 一、学校行事表 一、学校経費一覧表 一、児童身体状況 一、卒業及入学概況 一、中途入退学状況 一、児童出身県別表 一、保護者職業別表 一、保護者会概況 一、コロール青年学校概況</p>	<p>南洋庁サイパン尋常高等小学校 学校要覧 昭和十三（1938）年七月一日 校訓 校歌 ○概観 ●沿革 ●面積 ●職員 ●児童（十三年七月一日現在） ●出席歩合 ●卒業児童数 ●在籍児童本籍別表 ●保護者職業（十三年七月一日現在） ●経費ノ状況 ○経営要項 一、経営ノ原拠 二、教育ノ方針 三、教授上ノ施設経営 1 教育ノ方針 2 教授ノ施設 A 備準 B 指導 C 整理 四、訓練上ノ施設経営 1 訓練ノ方針 2 教化的施設 3 実行の施設 五、養護上ノ施設経営 1 養護ノ方針 2 養護ノ施設 六、職員 1 研究 2 処分 対外的教育施設 1 保護者会 2 同窓会 3 青年団</p>
---	---	---